

# 学校現場における道徳教育改革への対応と 意識に関する調査研究(2)

—2018年度全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として—

Research on Actuality of Correspondence to Moral Education Reform in Schools and Teacher's Consciousness (2):  
Focusing on Statistical Analysis and Free Description Analysis in Surveys for Schools across Japan

押谷由夫 \*・矢作信行 \*\*・齋藤道子 \*\*

木崎ちのぶ \*\*・谷山優子 \*\*

小山久子 \*\*\*・醍醐身奈 \*\*\*\*

OSHITANI, Yoshio, YAHAGI, Nobuyuki, SAITO, Michiko

KIZAKI, Chinobu, TANIYAMA, Yuko

KOYAMA, Hisako, & DAIGO, Mina

## 目次

研究の動機

I. 本研究の目的と方法

II. 調査結果の統計的分析

III. 全国調査の自由記述の分析

IV. テキストマイニングを用いた全国調査  
自由記述の分析

注

\* 武庫川女子大学教育研究所・副所長、教授

\*\* 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程

\*\*\* 大阪芸術大学・特任教授

\*\*\*\* 目白大学・専任講師



## 研究の動機

文部科学省は、新教育課程に先駆け、道徳教育の抜本的改善・充実に取り組んでいる。その中核に「特別の教科 道徳」の設置があり、小学校では2018年度から、中学校では2019年度から全面実施されている。学校現場では、その対応に様々に取り組んでいるが、このような道徳教育改革にどのような意識をもっているのだろうか。行政的取組みは、学校現場に強制されるという意識をもたれがちである。どのような行政的取組みでも、学校教育をより充実させるためのものであり、そのことにかかわって慎重に検討して決定される。しかし、どれだけ慎重に検討されたものであっても、それを実行する側の捉え方が、やらされるといった受動的認識であれば、効果は期待できないし、誤って理解していたのでは、逆効果の実践に陥ってしまうことにもなりかねない。

そこで、新しい道徳教育への移行期にあるこの時期に、学校現場の教師の意見や具体的取組について調査し、教師がその意義を理解し、各学校が主体的に取り組む、意図される効果を上げられるようにするための対策を、積極的に探究することが求められる。

## I. 本研究の目的と方法

### 1. 本研究の目的

本研究チームでは、小学校、中学校で「特別の教科 道徳」の設置が決定し、小学校で全面実施に入る前の2018年3月時点において、学校現場の状況を把握すべく、第1回の全国調査を行い、学校現場の教師の意識と実際の取組み等について分析した<sup>(1)</sup>。今回は、2019年3月時点において、調査対象を同じ学校として、どのような取組がなされ、どのような意識の変化や取組の変化が見られるかを明らかにし分析する。そして、その結果を基に、学校現場の教職員がより主体的、意欲的に道徳教育改善・充実に取り組んでいただけるようにするための提案を行うことを目的とする。

なお、第3回目の調査を2020年3月に行い、小学校、中学校において「特別の教科 道徳」が全面実施された2019年度の実態を明らかにし、第1～3回までの調査を総合的に分析することを計画している。

### 2. 調査の方法

2018年3月に行った第1回調査においては、調査対象校の選定は『全国学校総覧2017年度』（原書房）より、全国47都道府県の全部の小学校・中学校から、およそ1割の学校を無作為に抽出し、アンケート用紙を送付するという方法を取った。今年度も、昨年度対象とした学校をそのまま調査対象校とした。

発送学校数は、3,331校（第1回調査と同様の学校に発送したが5校から宛先不明で

帰ってきた。統廃校の対象になった学校と思われる)。回収学校数は、1,004校。回収率は、30.1%。回答者の学校種別地域別、回答者の職種別、年齢別の状況は、次の表の通りである。

表1 学校の種類、地域、回答者の職種、年齢

学校の種類					学校の地域										
全体	小学校	中学校	小、中一貫校	不明	全体	北海道・東北	関東	甲信越	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州・沖縄	不明
1004	633	352	18	1	1004	175	225	62	29	103	154	84	47	125	0
100.0	63.0	35.1	1.8	0.1	100.0	17.4	22.4	6.2	2.9	10.3	15.3	8.4	4.7	12.5	0.0

回答者の職種							回答者の年齢									
全体	校長	副校長(教頭)	道徳教育推進教師(道徳主任)	研究主任	教務主任、それら以外	不明	全体	29歳以下	30～34歳	35～40歳	41～45歳	46～50歳	51～55歳	56～60歳	61歳以上	不明
1004	104	189	598	85	27	1	1004	56	92	131	132	165	224	182	20	2
100.0	10.4	18.8	59.6	8.5	2.7	0.1	100.0	5.6	9.2	13.0	13.1	16.4	22.3	18.1	2.0	0.2

(上段：実数、下段：%)

### 3. 調査の内容

アンケートでは、大きく次のような内容について尋ねている。

- 1 学校教育全体で取り組む道徳教育について
- 2 「特別の教科 道徳」(中学校は道徳の時間)の年間指導計画について
- 3 道徳の授業について
- 4 自分の勤める学校の先生方の道徳教育に対する様子について
- 5 回答いただいた教師の道徳教育に関する意識について
- 6 具体的要望について
- 7 自由記述(道徳教育の充実に関して、ぜひ伝えたいことや、要望、意見などについて)

(小学校のみ)

- 1 教科書を使うようになって、道徳の授業はしやすくなったか
- 2 教科書を活用した程度について
- 3 「特別の教科 道徳」の評価について

(文責：押谷由夫)

## II. 調査結果の統計的分析

アンケートの質問項目にしたがって、その結果について統計的分析を行う。なお、フェースシートを活用したクロス分析や、特定項目の因子分析、2017年度に行った第1回調査との比較分析も適宜行うことにする。

### 1. 各校の道徳教育への対応

#### (1) 道徳教育推進教師の特徴

まず、道徳教育推進教師は、どのような教師が割り当てられているかを見てみたい。「ベテラン」と「中堅」の教師が、全体の85%を占める。これは、2017年度も同様であった。地域別では、「北海道・東北」が92%と高い。「近畿」は若手教師が19%で、他地域より高い。

表2

道徳教育推進教師（道徳主任）はどのような先生がなられていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人以下	701人以上	北海道・東北	関東・甲信越	北陸・中部	近畿	中国・四国	九州・沖縄
ベテランの先生	357 36%	248 39%	109 31%	98 43%	50 38%	78 45%	101 36%	47 36%	51 33%	50 38%	38 31%
中堅の先生	480 49%	298 47%	182 52%	93 41%	65 50%	82 47%	142 50%	62 47%	74 48%	59 45%	71 57%
若手の先生	143 15%	83 13%	60 17%	37 16%	16 12%	15 9%	40 14%	23 17%	29 19%	22 17%	15 12%

#### (2) 道徳教育を重視している学校の割合

勤務する学校で道徳教育が「重視されている」、「まあまあ重視されている」と回答した割合は、小学校は95%、中学校が84%で、11%の開きがある。小規模校（「200人以下」）も大規模校（「701人以上」）もほぼ同じ9割前後であるが、小規模校の方がより重視されている。地域別でみると、「中国・四国」が95%となり、2017年度の85%から10%伸びている。

表3

学校経営において道徳教育が重視されていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人 以下	701人 以上	北海道・ 東北	関東・ 甲信越	北陸・ 中部	近畿	中国・ 四国	九州・ 沖縄
重視されている	372 38%	284 45%	88 25%	94 41%	46 35%	73 42%	107 37%	44 33%	53 34%	51 39%	49 40%
まあまあ重視されている	521 53%	315 50%	206 59%	113 50%	70 53%	89 51%	151 53%	71 54%	83 54%	73 56%	64 52%
あまり重視されていない	85 9%	32 5%	53 15%	19 8%	15 11%	12 7%	28 10%	17 13%	18 12%	7 5%	7 6%
重視されていない	5 1%	0 0%	5 1%	2 1%	1 1%	1 1%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	4 3%

### (3) 道徳教育を推進させるための組織を作っている学校の割合

道徳教育推進のための組織を作っている学校は、全体で65%。2017年度と同様である。大規模校（「701名以上」）の組織づくりの方が進んでおり、小規模校（「200人以下」）との差は21%となっている。小規模校は、学校全体で取組んでいる割合が高いと考えられる。地域別で比較すると、「北海道・東北」や「中国・四国」での組織づくりが低い。小規模校が多いことが原因とも考えられる。

表4

学校全体で道徳教育を推進するための組織を作っていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人 以下	701人 以上	北海道・ 東北	関東・ 甲信越	北陸・ 中部	近畿	中国・ 四国	九州・ 沖縄
前から作っている	564 59%	359 59%	205 60%	102 46%	88 67%	95 55%	182 66%	58 46%	110 73%	58 46%	70 58%
今年度から作った	59 6%	32 5%	27 8%	14 6%	8 6%	8 5%	20 7%	13 10%	8 5%	9 7%	6 5%
作っていない	332 35%	220 36%	112 33%	104 47%	35 27%	70 41%	75 27%	54 43%	32 21%	60 47%	45 37%

## 2. 全体計画について

### (1) 全体計画に書かれている内容

質問した項目は、今まであまり書かれなかったもので、これからの全体計画に是非入れてほしい項目を挙げている。「入れていない」を見ると、「近隣の学校や幼児教育施設との連携」が48%、「道徳教育の研修計画」が36%である。全体計画に書かれていないから行っていないというわけではないと思われるが、これから特に求められるチーム学校やカリキュラムマネジメントの観点からも、早急に検討し、全体計画に明記し、実施する必要がある。

表 5

全体計画に入れている内容

	回 答								
	具体的にしている			基本方針としてしている			入っていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 子どもたち一人一人への心の安定や道徳的対応について	249 26%	161 26%	88 25%	521 53%	323 52%	198 57%	207 21%	143 23%	64 18%
2. 環境の整備について	240 25%	169 27%	71 20%	483 49%	308 49%	175 50%	258 26%	154 24%	104 30%
3. 学級における道徳教育の取り組みについて	443 45%	305 48%	138 39%	436 44%	265 42%	171 49%	105 11%	62 10%	43 12%
4. 近接の学校や幼児教育施設との連携について	162 17%	123 20%	39 11%	346 35%	235 37%	111 32%	475 48%	274 43%	201 57%
5. 道徳教育の研修計画について	274 28%	188 30%	86 25%	357 36%	217 34%	140 40%	349 36%	227 36%	122 35%

(2) 全体計画に書かれている内容の達成度

次に尋ねた項目は、一般的に求められるものであり、ほとんどの学校において全体計画に示されている。そのことが、どの程度達成されているかを尋ねると、「だいたい達成されている」「まあまあ達成されている」に回答した学校が、90～51%になっており、項目間で開きがある。「あまり達成されていない」「見直しが必要である」と回答した学校が多いのは、「地域との連携による道徳教育」が44%、「家庭との連携による道徳教育」が40%である。「各教科における道徳教育」も31%、「総合的な学習の時間における道徳教育」29%になっている。いずれも中学校が高い。これらの項目は、これからの道徳教育の充実においてポイントになることでもあり、内容の明記が求められる。

表 6

全体計画に書かれていることがどの程度達成されていると評価できるでしょうか

	回 答														
	だいたい達成されている			まあまあ達成されている			あまり達成されていない			見直しが必要である			全体計画に示していない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 道徳の時間（「特別の教科 道徳」）の指導	442 45%	336 53%	106 30%	498 45%	265 42%	173 49%	59 6%	20 3%	39 11%	28 3%	6 1%	22 6%	15 2%	5 1%	10 3%
2. 各学年の道徳教育	356 36%	263 42%	93 27%	518 53%	325 51%	193 55%	67 7%	29 5%	38 11%	24 2%	4 1%	20 6%	19 2%	12 2%	7 2%
3. 各学級の道徳教育	339 35%	248 39%	91 25%	510 52%	326 52%	184 53%	65 7%	27 4%	38 11%	26 3%	9 1%	17 5%	42 4%	22 4%	20 6%
4. 各教科の特質に応じた道徳教育	127 13%	96 15%	31 9%	526 54%	383 61%	143 41%	253 26%	126 20%	127 36%	52 5%	18 3%	34 10%	26 3%	10 2%	16 5%
5. 特別活動における道徳教育	160 16%	115 18%	45 13%	571 58%	387 61%	184 52%	180 18%	100 16%	80 23%	55 6%	19 3%	36 10%	18 2%	12 2%	6 2%
6. 総合的な学習の時間における道徳教育	124 13%	83 13%	41 12%	547 56%	381 60%	166 47%	230 23%	131 21%	99 28%	59 6%	24 4%	35 10%	23 2%	14 2%	9 3%
7. 日常生活における道徳教育	234 24%	169 27%	65 19%	581 59%	381 60%	200 57%	107 11%	56 9%	51 15%	32 3%	7 1%	25 7%	30 3%	20 3%	10 3%
8. 家庭との連携による道徳教育	106 11%	85 13%	21 6%	443 45%	313 50%	130 37%	302 31%	174 28%	128 37%	84 9%	33 5%	51 15%	48 8%	27 4%	21 6%
9. 地域との連携による道徳教育	98 10%	78 12%	20 6%	379 39%	260 41%	119 34%	328 33%	204 32%	124 35%	111 11%	53 8%	58 17%	68 7%	38 6%	30 9%
10. 重点目標の指導	256 27%	207 33%	59 17%	542 55%	356 57%	185 53%	115 12%	46 7%	69 20%	40 4%	13 2%	27 8%	16 2%	8 1%	8 2%

### (3) 家庭や地域連携の効果

家庭や地域との連携について、具体的に取り組んでいることの効果を尋ねると、「家庭への学校だよりの配布」が97%の学校で行っており、92%の学校で効果的と答えている。学校規模による違いはあまり見られない。地域や家庭との連携に関する取組は、ほとんどの学校が効果的であったと答えている。「保護者や地域の人たちに協力いただく授業」は、2017年度の73%から87%になり、14%上がっている。道徳授業の地域公開も86%の学校で行っており、75%の学校で効果的であると答えている。

表7

家庭や地域との連携について

	回 答																			
	効果的である					あまり効果があるとは思えない					見直しが必要である					行っていない				
	全体	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上	全体	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上	全体	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上	全体	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上
1. 家庭への学校だよりの配布	917 92%	213 94%	400 90%	178 92%	126 96%	45 5%	8 4%	25 6%	9 5%	3 2%	7 1%	1 0%	4 1%	2 1%	0 0%	28 3%	5 2%	15 3%	5 3%	3 2%
2. 地域への学校だよりの配布	796 80%	193 85%	346 78%	151 78%	106 80%	80 8%	13 6%	38 9%	19 10%	10 8%	9 1%	3 1%	3 1%	3 2%	0 0%	113 11%	19 8%	56 13%	21 11%	17 13%
3. 地域の人たちも参加 いただく催し	848 85%	203 89%	369 84%	157 81%	119 90%	64 6%	17 8%	26 6%	17 9%	4 3%	10 1%	1 0%	5 1%	3 2%	1 1%	75 8%	7 3%	42 10%	17 9%	9 7%
4. 保護者や地域の人 たちに協力いただく授業	868 87%	203 89%	385 87%	160 83%	120 90%	44 4%	10 4%	17 4%	12 6%	5 4%	12 1%	2 1%	6 2%	3 1%	1 7%	74 6%	13 8%	35 8%	19 10%	7 5%
5. 保護者や地域の人 たちと一緒に話し合える	795 80%	192 84%	356 80%	144 75%	103 77%	72 7%	11 5%	32 7%	19 10%	10 8%	17 2%	1 0%	5 1%	8 4%	3 2%	114 11%	24 11%	51 12%	22 11%	17 13%
6. 道徳授業の地域の人 たちの公開	748 75%	178 78%	334 75%	140 72%	96 72%	94 9%	19 8%	45 10%	20 10%	10 8%	14 1%	4 2%	2 1%	5 3%	3 2%	143 14%	27 12%	63 14%	29 15%	24 18%

### (4) 全体計画の変更の割合（2017年度の全体計画に対して）

本調査で尋ねているのは、2018年度の実態であり、「特別の教科 道徳」が小学校で全面実施され、中学校では来年度からというときである。そこで、2018年度の全体計画を2017年度の全体計画に対してどの程度変更したかについて、小学校と中学校を比較してみると、「大幅に変えている」「ある程度変えている」が小学校67%、中学校56%であった。小学校では、7割近い学校が変えているが、中学校も新しい道徳教育に合わせて改善を図っているとみることができる。

表8 今年度の全体計画はどの程度変更しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
大幅に変えている	117 13%	82 14%	35 11%
ある程度は変えている	466 50%	317 53%	149 45%
あまり変えていない	308 33%	186 31%	122 37%
変えていない	36 4%	12 2%	24 7%



### (5) 全体計画の実施や見直しに関する研修

道徳教育の全体計画の実施や見直しに関する研修は、小学校と中学校を比較すると、「行っていない」が小学校 15%、中学校 23%であった。ただし、中学校は「3～4回行った」が、小学校より多く 20%である。中学校が、2019 年度に向けての準備段階として取り組んでいることがうかがえる。

表 9

今年度、道徳教育の全体計画の実施や見直し等について研修はどの程度行いましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
行っていない	144 18%	79 15%	65 23%
1～2回行った	485 61%	341 67%	144 51%
3～4回行った	131 16%	75 15%	56 20%
5～9回行った	24 3%	13 3%	11 4%
10回以上行った	13 2%	5 1%	8 3%

## 3. 年間指導計画について

### (1) 年間指導計画に書いている内容の効果

年間指導計画に「基本的発問」を書いて効果的であったのは、全体で 74%であった。小学校を見ると、2017 年度は 56%、2018 年度は 78% で 20 ㊦上がっている。ただし、「書いていない」学校が 18%あり、今後の課題である。「板書計画」を書いている学校が、2017 年度は全体で 24%であったのが、2018 年度は 58%になっている。特に小学校で比較すると、2017 年度の 21%が 63%に伸びている。板書は、授業全体を分かりやすく示すことができ、具体的な授業について検討されていると捉えられる。

なお、事前指導や事後指導については、「書いていない」学校が、小学校で 31%、中学校で 24%と多い。取り組んでいるところは、効果的であると答えた学校が多く、今後の課題である。また、「地域との連携」は、2017 年度とほぼ同じであるが、更に効果を上げる取組が求められる。

表 10

年間指導計画に書かれていることがどの程度効果を上げていますか

	回 答											
	効果的である			あまり効果的ではない			見直しが必要である			書いていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 基本的発問	718 74%	491 78%	227 66%	50 5%	27 4%	23 7%	32 3%	11 2%	21 6%	170 18%	98 16%	72 21%
2. 板書計画	563 58%	398 63%	165 48%	78 8%	41 7%	37 11%	34 4%	11 2%	23 7%	296 31%	178 28%	118 34%
3. 事前の指導に関すること	604 62%	413 66%	191 56%	88 9%	54 9%	34 10%	43 4%	19 3%	24 7%	235 24%	142 23%	93 27%
4. 事後の指導に関すること	619 64%	426 68%	193 56%	86 9%	50 8%	36 11%	42 4%	16 3%	26 8%	222 23%	135 22%	87 25%
5. 家庭との連携に関すること	515 53%	380 61%	135 40%	171 18%	104 17%	67 20%	78 8%	34 5%	44 13%	206 21%	110 18%	96 28%
6. 地域との連携に関すること	468 48%	345 55%	123 36%	189 20%	124 20%	65 19%	85 9%	37 6%	48 14%	228 24%	122 19%	106 31%
7. 各教科等との関連に関すること	641 66%	476 76%	165 48%	157 16%	75 12%	82 24%	84 9%	33 5%	51 15%	88 9%	43 7%	45 13%

(2) 郷土教材や学校独自教材の活用

郷土教材や学校独自の教材を「入れていない」とする回答について、小学校で2017年度と比較してみると、2017年度は29%、2018年度は32%であった。「1～2教材入れている」を見ると、2017年度54%、2018年度51%であった。「入れていない」は、少し増えて、32%の学校が回答している。小学校で「特別の教科 道徳」が全面実施され、教科書が使用されるようになったが、郷土教材や学校独自の教材は、数は減っているものの、7割の学校で使用されている。

表 11

郷土教材や学校独自に開発した教材をどの程度入れていますか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
入れていない	283 29%	199 32%	84 24%
1～2教材入れている	473 48%	319 51%	154 44%
3～5教材入れている	171 18%	90 14%	81 23%
6～10教材入れている	35 4%	18 3%	17 5%
11教材以上入れている	17 2%	4 1%	13 4%

(3) 一定期間の道徳授業を振り返る授業の効果

2018年3月の調査で、振り返りの時間を「設けている」学校は、全体で18%あったが、「来年度設けたい」としたのは28%であった。2019年3月の調査では、51%の学校が振り返りの時間を設けており、ほとんどの学校が「効果的である」「ある程度効果的である」と答えている。

表 12

道徳の全体授業を振り返る時間を設けていますか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
効果的である	157 16%	98 16%	59 17%
ある程度効果的である	325 33%	223 35%	102 29%
あまり効果的ではない	19 2%	13 2%	6 2%
設けていない	479 49%	298 47%	181 52%

(4) 重点的に指導した内容の効果

重点的に指導する内容については、「計画的に取り組み効果も感じられた」学校が45%、「計画的には取り組めなかったが効果的であった」が23%で、68%の学校で「効果的だった」としている。僅差であるが、小規模校ほど効果を感じている。さらに、より効果的な重点的指導の工夫が求められる。

表 13

重点的に指導する内容項目について

	全体	200人 以下	201人 ～ 500人	501人 ～ 700人	701人 以上
計画的に取り組み効果も感じられた	438 45%	106 47%	193 45%	81 42%	58 44%
計画的に取り組んだがあまり効果的ではなかった	218 22%	40 18%	97 23%	51 26%	30 23%
計画的には取り組めなかったが効果的だった	222 23%	55 24%	92 21%	44 23%	31 23%
計画的に取り組めなかったし効果も感じられなかった	107 11%	26 12%	50 12%	17 9%	14 11%

(5) 年間指導計画の見直し

2018年度に年間指導計画を見直したかどうかを、小学校と中学校で比較してみると、「見直さなかった」のは、小学校が23%、中学校が32%であった。「3回以上見直した」のは、中学校の方が小学校の2倍に当たる13%であった。中学校では、2019年度からの「特別の教科 道徳」の全面実施に向けて、年間指導計画の検討がなされていることがうかがえる。

表 14

今年度、どの程度年間指導計画の見直しを行いましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
見直さなかった	255 26%	144 23%	111 32%
1回見直した	504 52%	368 58%	136 39%
2回見直した	138 14%	81 13%	57 16%
3回以上見直した	82 8%	38 6%	44 13%

(文責：木崎ちのぶ)

## 4. 道徳の授業について

## (1) 学校全体で道徳授業に取り組める体制について

2017年度は、「学校全体で取り組む体制ができているか」の問いに95%が肯定的に回答していた。2018年度はそれが機能したかどうかを尋ねると、肯定的な回答が80%であった。「体制ができている」との回答は、小学校で1%、中学校で4%と、ほとんどの学校において、学校全体で体制を作って道徳の授業に取り組んでいることがうかがえる。

表 15

今年度、学校全体で道徳の授業に取り組もうとする体制は機能しましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
機能したと思う	298 30%	223 35%	75 22%
だいたい機能したと思う	488 50%	319 51%	169 49%
あまり機能しなかったと思う	116 12%	54 9%	62 18%
来年度見直したい	53 5%	27 4%	26 8%
体制ができている	24 3%	9 1%	15 4%

## (2) 学校全体での道徳授業研修

学校全体での研修を「行っていない」学校が、小学校で10%、中学校が16%ある。学年ごとの研修を行っているとも考えられるが、どの学校でも学校全体での研修が大切である。「1～3回行った」が、小・中いずれも3分の2近くの66%であった。「7回以上行った」が小学校で10%であり、全面実施1年目の意気込みも感じられる。

表 16

今年度、学校全体で道徳授業の研修をどの程度行いましたか

	全体	校種別	
		小学校	中学校
行っていない	120 12%	64 10%	56 16%
1～3回行った	648 66%	418 66%	230 66%
4～6回行った	133 14%	88 14%	45 13%
7回以上行った	78 8%	61 10%	17 5%

## (3) 道徳授業についての普段の話し合い

2018年度は、道徳授業の話し合いが普段に「よく行われている」17%、「ときどき行われている」が57%で、合計が74%（2017年度は61%）であり、2017年度と比べて13%上昇している。小学校、中学校ともに同様の傾向にある。地域の実態を2017年度と比べてみると、九州・沖縄が68%から20%、北海道が47%から18%伸びている。道徳の授業について職員室でも話題になることが多くなっていると予測できる。

表 17

道徳授業の話し合いはどの程度行われていますか

	全体	校種別		学校規模		地域別					
		小学校	中学校	200人 以下	701人 以上	北海道・ 東北	関東・ 甲信越	北陸・ 中部	近畿	中国・ 四国	九州・ 沖縄
よく行われている	164 17%	96 15%	68 20%	24 11%	26 20%	17 10%	46 16%	21 16%	32 21%	23 18%	27 22%
ときどき行われている	558 57%	369 59%	189 54%	112 49%	84 64%	97 55%	168 59%	74 57%	82 55%	66 51%	82 66%
あまり行われていない	195 20%	131 21%	64 18%	65 29%	18 14%	44 25%	56 20%	27 21%	29 19%	29 22%	12 10%
ほとんど行われていない	61 6%	34 5%	27 8%	26 12%	3 2%	17 10%	15 5%	9 7%	7 5%	12 9%	4 3%

## (4) 道徳授業の変化

全体にわたって、「ほとんど変わらない」としている学校は、3%程度であり、道徳の授業においては、全学年にわたって、「かなり変わってきている」「だいぶ変わってきている」と回答した学校が、70%以上である。

「子どもたちへの対応」では、「かなり変わってきている」15%、「だいぶ変わってきている」57%となっており、変わってきていると答えた学校が72%である。「授業の評価」は74%であり、昨年と比較すると26%上昇している。学校現場の努力がうかがえる。「あまり変わっていない」とする項目を見ると、事後の指導、事前の指導が高く、

47%と44%である。小学校と中学校を比較すると、小学校の方が教材の多様性以外の項目はすべて高いし、大きな差も指摘できる。ここに挙げられている項目は、授業を充実させるためのポイントであり、さらに変化を実感できるように取り組む必要がある。特に中学校においては、「特別の教科 道徳」の全面実施を控えていっそうの対応が求められる。

表 18

年間指導計画に書かれていることがどの程度効果を上げていますか

	回 答											
	かなり変わってきている			だいぶ変わってきている			あまり変わっていない			ほとんど変わっていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 低学年の道徳授業 (中学校では1年)	159 16%	104 17%	55 16%	556 57%	393 63%	163 47%	231 24%	122 20%	109 31%	29 3%	8 1%	21 6%
2. 中学年の道徳授業 (中学校では2年)	141 14%	99 16%	42 12%	554 57%	396 63%	158 45%	249 26%	126 20%	123 35%	32 3%	7 1%	25 7%
3. 高学年の道徳授業 (中学校では3年)	134 14%	93 15%	41 12%	545 56%	394 63%	151 43%	263 27%	130 21%	133 38%	33 3%	10 2%	23 7%
4. 事前の指導の工夫	90 9%	58 9%	32 9%	404 42%	274 44%	130 38%	429 44%	273 44%	156 45%	51 5%	23 4%	28 8%
5. 導入の工夫	140 14%	98 16%	42 12%	520 53%	350 56%	170 49%	291 30%	172 27%	119 34%	26 3%	9 1%	17 5%
6. 教材提示の工夫	139 14%	94 15%	45 13%	530 54%	366 58%	164 47%	298 29%	157 25%	121 35%	30 3%	12 2%	18 5%
7. 展開の工夫	178 18%	126 20%	52 15%	575 59%	393 63%	182 52%	204 21%	104 17%	100 29%	21 2%	6 1%	15 4%
8. 終末の工夫	145 15%	103 16%	42 12%	530 54%	365 58%	165 48%	273 28%	152 24%	121 35%	27 3%	9 1%	18 5%
9. 教材の多様性	121 12%	68 11%	53 15%	443 45%	295 47%	148 43%	369 38%	242 39%	127 37%	42 4%	22 4%	20 6%
10. 事後の指導の工夫	65 7%	50 8%	15 4%	402 41%	278 44%	124 36%	456 47%	276 44%	180 52%	50 5%	23 4%	27 8%
11. 板書の工夫	156 16%	120 19%	36 10%	480 49%	354 56%	126 36%	307 32%	147 23%	160 46%	33 3%	8 1%	25 7%
12. 子どもたちへの対応	145 15%	102 16%	43 12%	551 57%	380 61%	171 49%	253 26%	138 22%	115 33%	27 3%	8 1%	19 6%
13. 授業の評価	308 32%	248 40%	60 17%	424 44%	304 49%	120 35%	209 22%	73 12%	136 40%	29 3%	1 0%	28 8%

### (5) 道徳ノート、道徳ファイルの効果

道徳ノートが「効果的であった」としている学校が57%、道徳ファイルが「効果的であった」としている学校は63%であった。一方、「道徳ノートを持たせていない」学校は、全体で38%（中学校が55%）であり、2017年度は、38.3%であった。「道徳ファイルを持たせていない」学校は、全体で31%、2017年度は30.5%であった。

表 19

道徳ノートは効果的でしたか

1. 道徳ノート	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	146 15%	128 20%	18 5%
ある程度効果的であった	318 33%	230 37%	88 26%
少しは効果的であった	91 9%	60 10%	31 9%
改善を必要とする	42 4%	26 4%	16 5%
持たせていない	372 38%	182 29%	190 55%

道徳ファイルは効果的でしたか

2. 道徳ファイル	全体	校種別	
		小学校	中学校
大変効果的であった	131 14%	97 16%	34 10%
ある程度効果的であった	345 36%	216 35%	129 37%
少しは効果的であった	127 13%	68 11%	59 17%
改善を必要とする	67 7%	27 4%	40 12%
持たせていない	301 31%	216 35%	85 25%

(6) 道徳授業改革がどのようになされているか

現在提案されている「登場人物への自我関与が中心の授業」は93%、「問題解決的な授業」は74%の学校が「行っている」と答えている。「学級活動との関連を重視した授業」67%、「学級経営との関連を重視した授業」78%も高く、学級づくりの基盤になっていることがうかがえる。「日常生活との関連を重視した授業」も87%と高い。「各教科との関連を重視した授業」は「それほど行っていない」が60%で、特に教科担任制である中学校は73%である。また、「総合的な学習の時間との関連を重視した授業」について、「それほど行っていない」が小学校、中学校ともに49%となっている。「総合的な学習の時間」は、道徳の授業と関連させて問題（課題）探究的な道徳学習を展開することができる。もっと積極的に関連を図る必要がある「道徳的行為に関する体験的な授業」は、「それほど行っていない」と答えた学校が、小学校で41%、中学校で54%になっている。

表 20

次のような道徳の授業をどの程度行っていますか

	回 答								
	行っている			それほど行っていない			行っていない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 登場人物への自我関与が中心の授業	908 93%	604 96%	304 87%	59 6%	21 3%	38 11%	9 1%	2 0%	7 2%
2. 問題解決的な授業	725 74%	497 79%	228 65%	241 25%	126 20%	115 33%	12 1%	6 1%	6 2%
3. 道徳的行為に関する体験的な授業	508 52%	362 58%	146 42%	445 46%	257 41%	188 54%	24 3%	9 1%	15 4%
4. 各教科との関連を重視した授業	356 36%	288 46%	68 20%	588 60%	335 53%	253 73%	35 4%	7 1%	28 8%
5. 学級活動との関連を重視した授業	655 67%	436 69%	219 63%	314 32%	191 30%	123 35%	9 1%	3 1%	6 2%
6. 総合的な学習の時間との関連を重視した授業	476 49%	311 49%	165 47%	479 49%	311 49%	168 48%	24 3%	8 1%	16 5%
7. 学級経営との関連を重視した授業	761 78%	519 83%	242 70%	205 21%	105 17%	100 29%	11 1%	5 1%	6 2%
8. 日常生活との関連を重視した授業	855 87%	569 90%	286 82%	120 12%	60 10%	60 17%	4 0%	1 0%	3 1%
9. 家庭との関連を重視した授業	434 44%	332 53%	102 29%	509 52%	287 46%	222 64%	35 4%	10 2%	25 7%

(7) 多様な教材の活用

『私たちの道徳』については、教科書がなかった2017年度調査で、小学校で95%が使用されていた。教科書が使用された2018年度は、「よく使った」と「まあまあ使った」をあわせて62%であった。中学校は、2017年度も2018年度もまだ教科書がない状態で、2017年度は85%、今年度は80%であった。小学校については、2017年度の「都道府県や市町村などの開発教材」が、「よく使った」と「まあまあ使った」を合わせて76%であったのが62%に、「民間発行の副読本」が80%から44%に、「学校独自開発教材」が22%から21%になっている。教科書を使いつつ多様な教材が使われていることがわかる。

表 21

今年度、道徳授業で次のものを学校全体としてどの程度使いましたか

	回 答											
	よく使った			まあまあ使った			ほとんど使っていない			そのようなものはない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 文部科学省発行の『私たちの道徳』	195 20%	157 25%	38 11%	471 48%	231 37%	240 69%	265 27%	200 32%	65 19%	50 5%	43 7%	7 2%
2. 都道府県や市町村などで開発された「道徳教材資料」	89 9%	44 7%	45 13%	505 51%	345 55%	160 46%	296 30%	187 30%	109 31%	92 9%	57 9%	35 10%
3. 民間が発行する副読本の教材	257 26%	105 17%	152 44%	265 27%	163 26%	102 29%	284 29%	230 36%	54 16%	175 18%	134 21%	41 12%
4. 学校が独自に開発した教材	39 4%	11 2%	28 8%	277 28%	119 19%	158 45%	229 23%	175 28%	54 16%	434 44%	326 52%	108 31%



## 5. 道徳教育に関する先生方の意識

### (1) 道徳教育に対する先生方の意識

道徳教育の大切さ、道徳教育の目標、「特別の教科 道徳」の大切さについては、「理解していると思う」「だいたい理解していると思う」を合わせるといずれも9割になる。「特別の教科 道徳」の目標が85%、指導方法が81%、評価が75%である。

「道徳教育や道徳の授業に熱心な教師が多い」という問いに、「そう思う」「だいたいそう思う」を合わせると70%になる。しかし、「道徳の授業を楽しんでいる教師が多い」では、「あまり思わない」という回答をした学校が49%。中学校は55%である。「道徳教育は自分自身のことであると思っている教師が多い」に対して、「そう思う」16%、「だいたいそう思う」49%、合わせて65%になっている。自分も一緒に楽しみながら、子どもたちとともに成長しようとする意識を高められるようにすることが求められていると言える。

表 22

道徳教育に対する先生の理解度

	回 答											
	そう思う			だいたいそう思う			あまり思わない			ほとんど思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 道徳教育の大切さについて理解している	516 52%	350 55%	166 47%	430 44%	270 43%	160 46%	32 3%	11 2%	21 6%	6 1%	1 0%	5 1%
2. 道徳教育の目標について理解している	338 34%	243 38%	95 27%	532 54%	331 52%	201 57%	101 10%	54 9%	47 13%	13 1%	4 1%	9 3%
3. 「特別の教科 道徳」の大切さについて理解している	426 43%	302 48%	124 35%	473 48%	296 47%	177 50%	78 8%	33 5%	45 13%	7 1%	1 0%	6 2%
4. 「特別の教科 道徳」の目標について理解している	297 30%	219 35%	78 22%	544 55%	350 55%	194 55%	129 13%	60 10%	69 20%	14 1%	3 1%	11 3%
5. 「特別の教科 道徳」の指導方法について理解している	190 19%	134 21%	56 16%	606 62%	414 66%	192 55%	175 18%	82 13%	93 27%	12 1%	2 0%	10 3%
6. 「特別の教科 道徳」の評価について理解している	173 18%	129 20%	44 13%	561 57%	394 62%	167 48%	221 23%	101 16%	120 34%	28 3%	8 1%	20 6%
7. 道徳教育に熱心な教師が多い	176 18%	115 18%	61 17%	529 54%	368 58%	161 46%	260 26%	142 23%	118 34%	19 2%	7 1%	12 3%
8. 道徳の授業に熱心な教師が多い	173 18%	119 19%	54 15%	490 50%	350 56%	140 40%	296 30%	154 24%	142 41%	22 2%	8 1%	14 4%
9. 道徳教育は自分自身のことでもあると思っている教師が多い	152 16%	102 16%	50 14%	477 49%	325 52%	152 43%	326 33%	195 31%	131 37%	26 3%	8 1%	18 5%
10. 道徳の授業を楽しんでいる教師が多い	72 7%	41 7%	31 9%	395 40%	292 46%	103 29%	477 49%	285 45%	192 55%	39 4%	13 2%	26 7%

### (2) 教師から見た家庭や地域の人々への意識

教師から見た家庭や地域の人々の意識について「子どもの道徳教育に熱心な保護者が多い」では「そう思わない」という回答が62%（特に中学校は7割を超える）。2017年度（全体56%、小学校53%、中学校61%）と比べると若干低くなっている。「地域の人たちの協力が得られている」や「保護者の協力が得られている」については、5～6割である。更なる対応が求められる。そのためには、地域や保護者と情報交換を更に密にする必要がある。その際、子どもの道徳の評価（子どものよさや子どもの心の成長）を媒介することで、より効果を上げることができると考えられる。

表 23

先生から見て、家庭や地域の様子はいかがですか

	回 答					
	そう思う			そう思わない		
	全体	小学校	中学校	全体	小学校	中学校
1. 子どもの道徳教育について熱心な保護者が多い	375 38%	277 44%	98 28%	601 62%	352 56%	249 72%
2. 子どもの道徳教育について熱心な地域の人たちが多い	362 37%	276 44%	86 25%	613 63%	352 56%	261 75%
3. 地域の人たちの協力が得られている	526 54%	392 62%	134 38%	453 46%	237 38%	216 62%
4. 保護者の協力が得られている	590 60%	430 69%	160 46%	388 40%	198 32%	190 54%

### (3) 教師の道徳教育に対する意識

道徳教育に関する教師の意識は、ほぼ2017年度と同様であった。特に高いのが「道徳の授業を積み重ねていけば子どもたちの道徳性は高められる」で、9割を超えるのも2017年度と同様である。いじめの抑止に関しては、2017年度は89%、2018年度は85%が肯定的であった。回答者に注目して分析すると、特に教頭（副校長）88%、教務主任（研究主任）89%と高い。道徳教育と体力との関連については、5割以上が「そう思わない」と回答している。心の健康と体の健康の関連についての認識が、意外と低いと捉えられる。

「道徳の授業を年間40時間する」というのは、否定的意見が圧倒的に多い。深まりのある2時間続きの授業などが柔軟に指導できるというメリットがあるが、学校現場では35時間をこなすだけで精一杯であるといった実態も想像できる。また、「教員養成の時点から道徳教育を充実する」ことについては、肯定的回答が6割以上になっている。

道徳の時間が「特別の教科 道徳」になったことについては、約6割が肯定的に捉えている。昨年と比較して2割ほど増えている。道徳教育推進教師と教務主任・研究主任とを比較すると、8割教務主任・研究主任の方が高い。ここにも課題と可能性を指摘できる。

表 24

道徳教育に対する先生の意見

	回 答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任
1. 道徳の授業を積み重ねていけば子どもたちの道徳性は高のられる	884 91%	94 90%	168 89%	549 92%	73 86%	92 9%	10 10%	21 11%	49 8%	12 14%
2. 教師は自分のまき方を子どもたちにもっと話すべきだ	720 74%	83 80%	146 77%	433 72%	58 68%	256 26%	21 20%	43 23%	165 28%	27 32%
3. 道徳教育は他律的な道徳性の育成が根幹にあって自律的な道徳性がはぐくまれる	705 73%	72 70%	136 72%	436 74%	61 74%	260 27%	31 30%	53 28%	154 26%	22 27%
4. どのような子どもたちも学校に来ればしっかりと成長できる	619 64%	76 73%	126 67%	370 62%	47 56%	353 36%	28 27%	63 33%	225 38%	37 44%
5. 学力の育成は道徳教育を充実させることで高のられる	687 71%	78 75%	136 72%	417 70%	56 67%	286 29%	26 25%	53 28%	179 30%	28 33%
6. 体力の育成は道徳教育を充実させることで高のられる	444 46%	48 46%	88 47%	275 46%	33 39%	529 54%	56 54%	101 53%	321 54%	51 61%
7. いじめなどの子どもたちの問題行動は道徳教育を充実させることである程度改善される	829 85%	89 86%	167 88%	498 84%	75 89%	144 15%	15 14%	22 12%	98 16%	9 11%
8. 道徳教育を充実させることで家庭との連携が深まる	639 66%	73 70%	122 65%	382 64%	62 74%	334 34%	31 30%	67 35%	214 36%	22 26%
9. 道徳教育を充実させることで地域との連携が深まる	562 58%	73 70%	110 58%	329 55%	50 60%	411 42%	31 30%	79 42%	267 45%	34 41%
10. 「特別の教科 道徳」の授業時間を40時間くらいにすると多様な授業ができる	176 18%	19 18%	39 21%	104 17%	14 17%	799 82%	85 82%	150 79%	493 83%	71 84%
11. 教員養成において、もっと道徳教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	580 60%	59 57%	109 58%	364 61%	48 57%	395 41%	45 43%	80 42%	233 39%	37 44%
12. 道徳の時間が「特別の教科 道徳」になったことに賛成である	565 58%	61 59%	117 62%	333 56%	54 64%	407 42%	42 41%	71 38%	263 44%	31 37%

#### (4) 道徳教育に対する要望

これからの道徳教育に対する要望としては、2018年3月調査同様、「道徳教育や「特別の教科 道徳」の授業の進め方についての資料が欲しい」ということと、「研修の機会を多くしてほしい」が8割近くの学校で「そう思う」としている。その要望は、校長や副校長（教頭）よりも、道徳教育推進教師や教務主任が高い。

「特別予算が欲しい」は、「そう思う」が62%で、思ったよりも低い。すでに予算がつけられているところもあるのではないかと。また、「道徳教育の指定校を多くしてほしい」という要望に対しては、校長や道徳教育推進教師が少し高いものの、全体では26%になっている。「教務主任」が低いのが気になることである。学校全体で道徳教育を充実させるためには、指定校の認定を受けることは効果的だと思えるが、多忙になることを意識しているようにも捉えられる。

表 25

道徳教育に対する先生の意見

	回 答									
	そう思う					そう思わない				
	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任	全体	校長	副校長 (教頭)	推進教師 (道徳主任)	教務主任 研究主任
1. 道徳教育を充実させるための特別予算がほしい	605 62%	65 63%	113 60%	371 62%	56 66%	369 38%	39 38%	76 40%	225 38%	29 34%
2. 道徳教育の指定校を多くしてほしい	258 26%	31 30%	44 23%	168 28%	15 18%	718 74%	73 70%	145 77%	430 72%	70 82%
3. 道徳教育の専門教師を加配してほしい	569 58%	48 46%	100 53%	374 63%	47 55%	406 42%	56 54%	89 47%	223 37%	38 45%
4. 道徳教育研修の機会を多くしてほしい	765 79%	74 71%	128 68%	497 83%	66 78%	210 22%	30 29%	60 32%	101 17%	19 22%
5. 文部科学省は道徳教育の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	739 76%	67 64%	125 66%	480 80%	67 80%	236 24%	37 36%	64 34%	118 20%	17 20%
6. 文部科学省は「特別の教科 道徳」の授業の進め方についてもう少し詳しい資料を発行してほしい	766 79%	74 71%	133 70%	489 82%	70 83%	208 21%	30 29%	56 30%	108 18%	14 17%

## 6. 教科書を使った授業について（小学校のみ）

今年度から小学校において「特別の教科 道徳」が全面実施され教科書が無料配布され、評価も指導要録に記入するようになった。そのことについて、小学校のみに次のような質問をすることにした。

### （1）授業のしやすさ

まず、「教科書を使った授業のしやすさ」について尋ねた。肯定的な回答が71%であった。45%が「ともしやすくなった」と答えている。

表 26

教科書の使用による道徳授業のしやすさ

	回 答							
	全体	大変 しやすくなった と思う	だいぶん しやすくなった と思う	まあまあ しやすくなった と思う	あまり 変わらないと思う	少し しにくくなった と思う	だいぶん しにくくなった と思う	かなり しにくくなった と思う
小学校	577 100%	67 12%	193 33%	147 26%	126 22%	35 6%	7 1%	2 0%

### （2）教科書の活用状況

教科書の活用状況は、「そのまま活用した」のは「教材」が65%、「ねらい」56%である。「主題配列」や「授業の進め方」、「重点指導」では5割以上の学校で「ある程度変えた」り「だいぶん変えた」りしている。教科書やその教師用指導書を中心にしつつも、学校の実態や子どもの実態等によって柔軟に対応していることがうかがえる。

表 27

教科書の活用状況

	回 答				
	全体	そのまま 活用した	少し変えた	ある程度 変えた	だいぶ 変えた
1. 主題記列（指導の順番が教科書通りであったかどうか）	632 100%	180 29%	291 46%	103 16%	58 9%
2. 教材	631 100%	407 65%	193 31%	27 4%	4 1%
3. ねらい	632 100%	354 56%	238 38%	31 5%	9 1%
4. 授業の進め方	632 100%	121 19%	352 56%	133 21%	26 4%
5. 重点的指導	632 100%	202 32%	330 52%	82 13%	18 3%

## (3) 「特別の教科 道徳」の評価の時期について

「特別の教科 道徳」の評価は、「各学期」ごとに行っている学校が半数である。「特別の教科 道徳」が小学校で全面实施されて初めての年であり、教員間や保護者の理解をもとに慎重に進められている実態も想像できる。ただ、通知票を毎学期出している場合は、そこに「特別の教科 道徳」の評価も書くべきである。道徳の評価は、よりよく生きようとする心に関わって成長している一人一人の「よいところ」を見取り、勇気づける記述をするものであることから、学期ごとに評価し、子どもたちを勇気づけることが大切である。

表 28

今年度の「特別の教科 道徳」を評価した時期

	回 答			
	全体	各学期ごと に行った	年度末に まとめて行った	その他
小学校	579 100%	289 50%	245 42%	45 8%

(文責：谷山優子)

## 7. 教師の道徳教育に対する意識の傾向性（因子分析による検討）

教師の道徳教育に対する意識について、因子分析による検討を行った。回答している教員が、12項目の意見について回答した結果に対して、主因子法による因子分析を行った。4因子構造が妥当であると考えられ、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。明確な4つの因子が得られた。累積寄与率は、38.89であった。取り出した4因子について、次のように解釈した。

第1因子は、「道徳教育を充実させることで、地域との連携が深まる。家庭との連携が

深まる」と考えていることから、「学校・家庭・地域連携因子」とした。

第2因子は、「道德教育を充実させれば、体力や学力を高められる」と考えているため、「徳・知・体有効因子」とした。

第3因子は、「教員養成において、もっと道德教育の単位をとれるようにして充実を図るべきだ」「道德の時間が『特別の教科 道德』になったことに賛成である」と考えていることから、「道德教育充実期待因子」とした。

第4因子は、「道德教育を積み重ねていけば、道德性が高められる。いじめ行動が改善される」と考えていることから、「道德教育信頼因子」とした。

これら4つの因子が、教師の道德教育に対する意識の傾向性の背景にあると考えられる。

表29 教員の道德意識の因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

	因子			
	I	II	III	IV
9. 道德教育を充実させることで、地域との連携が深まる	.871	.002	-.011	-.041
8. 道德教育を充実させることで、家庭との連携が深まる	.860	-.028	-.001	.059
6. 体力の育成は、道德教育を充実させることで高められる	.058	.724	.067	-.147
5. 学力の育成は、道德教育を充実させることで高められる	-.001	.617	.113	.043
4. どのような子どもたちも、学校に来ればしっかりと成長できる	-.028	.420	-.109	.105
3. 道德教育は、他律的な道德性の育成が根幹にあって、自律的な道德性がはぐくまれる	-.057	.385	-.115	.202
2. 教師は、自分の生き方を子どもたちにもっと話すべきだ	-.021	.301	.017	.149
11. 教員養成において、もっと道德教育の単位をとれるようにし充実を図るべきだ	-.050	-.081	.734	-.017
12. 道德の時間が「特別の教科 道德」になったことに賛成である	.014	-.048	.502	.202
10. 「特別の教科 道德」の授業時数を40時間くらいにすると、もっと多様な授業ができる	.046	.084	.393	-.085
1. 道德の授業を積み重ねていけば、子どもたちの道德性は高められる	-.048	.099	-.004	.516
7. いじめなどの子どもたちの問題行動は、道德教育を充実させることである程度改善される	.127	.083	.026	.484

（文責：木崎ちのぶ）

### III. 全国調査の自由記述の分析

アンケート調査の内容に、今回も自由記述欄を設けている。一応書きやすいように、「ぜひ伝えたいこと」「要望」「意見」「その他」の項目を設けて記入してもらうようにした。重なりもあるがそれぞれの記述の内容について分析したい。

#### 1. 「ぜひ伝えたいこと」「要望」の分析

まず、自由記述部分の「ぜひ伝えたいこと」と「要望」の2項目について分析する。

##### (1) 「ぜひ伝えたいこと」について

「ぜひ伝えたいこと」についての結果は、次の通りである。

数値の高かったものについて、検討してみたい。まず、実際に評価を行ってみて、「難しかった、評価には課題がある。」という意見が28件あった。これは、昨年度は評価に対する不安であったが、今年度は、実際に評価を行ってみて、難しかったと捉えた教員が多かったと言える。

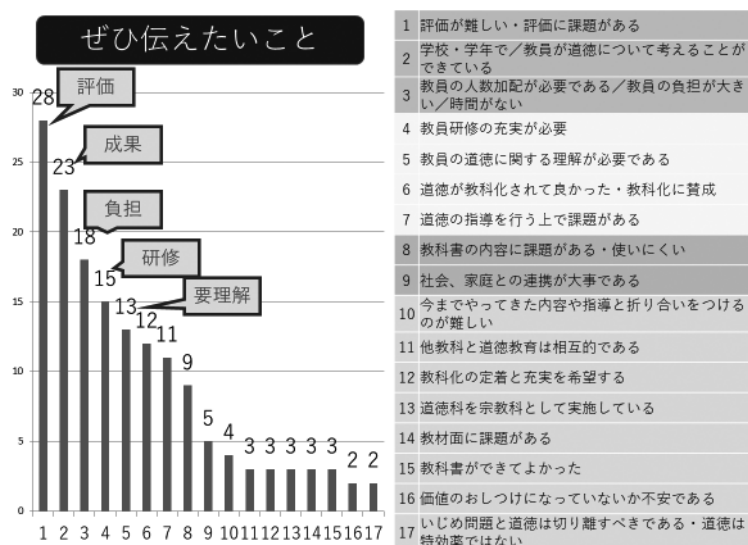


図1 「ぜひ伝えたいこと」の内容

次に多かったのは、「学校・学年で教員が道徳について考えるようになった。」という記述である。これは、校内研修が積極的に行われるようになったこと、学年会等で話題になることが多くなったこと等があると考えられる。

3番目は、教員の負担の増加である。特に意見として多かったのは、「加配教員を増やしてほしい。」という声である。専門的に道徳教育や「特別の教科 道徳」の授業について指導できる教員を確保してほしいという願いであると捉えられる。また、どの教室にも配慮を要する子どもたちが存在し、その対応にも教員の補助が欲しいという実態も考えられる。

4番目に多かった研修は、2番目とも関係するが、実際に「特別の教科 道徳」が始まり、研修が一層重要であることを実感したと言えよう。

5番目は、『特別の教科 道徳』に対する理解が教員にとって必要である。」と捉えている教員が多いと言える。

また、6番目の教科化されてよかったという意見は、アンケート項目とも関連させて捉えると、概ね教科化が肯定的に受け止められていると捉えられる。今までの道徳の時間の指導にかかわってきた教師が、「特別の教科 道徳」になり、その対応が難しいと捉えて

いる教員もいる。特に、これまで意欲的に道徳の時間に取り組んできた教員ほど悩んでいるのではないかと考えられる。

これらをまとめてみると、次のようになる。

- ・2017年度同様に評価に対して不安や戸惑いをもつ教員が多く見られる。
- ・各学校での理解が進み、道徳について、教員間での理解が進んでいることがうかがえる。
- ・実際に授業をするに当たって、加配等の教員の増加を求める声が多い。これは、2017年度に比べて増えているが、実際にスタートしてみてより強く感じていると捉えられる。
- ・教員の研修や道徳に対する理解を更に深める必要であると捉えている教員が多い。

## (2) 「要望」について

次に「要望」についての記述について考察する。全体的な「要望」は次の図のようにまとめられる。一番多かったのは、「是非伝えたいこと」と同様に評価に関することである。特に、文科省や教育員会から統一的な見解や指導資料を要望している。これはアンケートの結果と同様である。

2番目には、「特別の教科 道徳」に関して、教材研究をする時間を確保してほしいというものである。教員の負担を軽減し、課題研究に取り組める環境をつくってほしいということとも関連する。働き方改革ともかかわって早急に対応する必要がある。

3番目は、研修の時間をもっと増やしてほしいというものである。2番、3番とも道徳に対してもっと研究したい、そのための環境をつくってほしいという前向きな要望である。「ぜひ伝えたいこと」でも多く出てきた内容である。

4番目としては、道徳の専門的な教員が校内にほしいという要望である。年に数回の研修ではなく、日常的に質問したり、指導をお願いしたりできる加配を要望していると捉えられる。これも、「ぜひ伝えたいこと」でも多く出てきた内容である。

5番目、6番目は、教材に関することである。実際に教科書を使ってみての様々な問題がみられた結果であると考えられる。この点については、随時改善が望まれるところである。また、文科省に対しても随時情報を発信してほしいという要望があった。



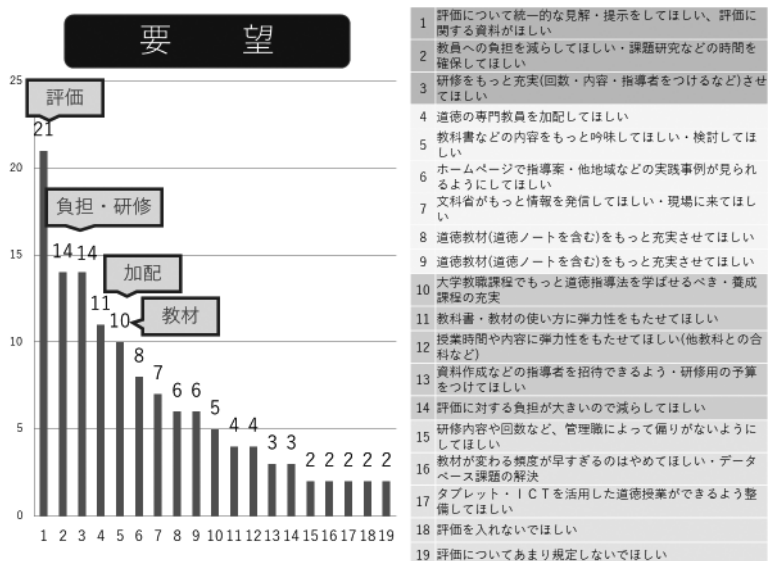


図2 「要望」の内容

少数ではあるが、今後増えることが予想されるICTに向けて、「特別の教科 道徳」の授業においても準備する必要があるという要望もみられる。

「要望」についてまとめて見ると

- ・「要望」においても、評価に関するものが「ぜひ伝えたいこと」と同様に多い。また、その内容は、2017年度の調査と同様、評価の問題への指摘が多い。
- ・教員研修の充実を求める声が多い。研修回数の増加を求めている。また、指導方法についても研修をしたい意向が強い。そのことともかかわらせて、専門的な教員の加配を求めている。
- ・教職員の負担軽減の視点から、加配やアシスタントティーチャーの増員を求める声が多い。
- ・2018年度の特徴としては、小学校で教科書が使用されたことから、教科書の内容をよく吟味してほしいという意見も多く記述されている。

小学校において「特別の教科 道徳」が全面実施されての「伝えたいこと」や「要望」であるが、この記述からは、評価や研修に関して教員の関心が高いことがうかがえる。そして、意見からは、積極的に「特別の教科 道徳」の設置を受け止め、よりよい授業を創っていきたいという意欲と願いがうかがえる。アンケートの結果を裏づけていると言えよう。

(文責：矢作信行)

## 2. 「意見」「その他」の分析

次に、「意見」と「その他」の内容を見ていきたい。

### (1) 「意見」について

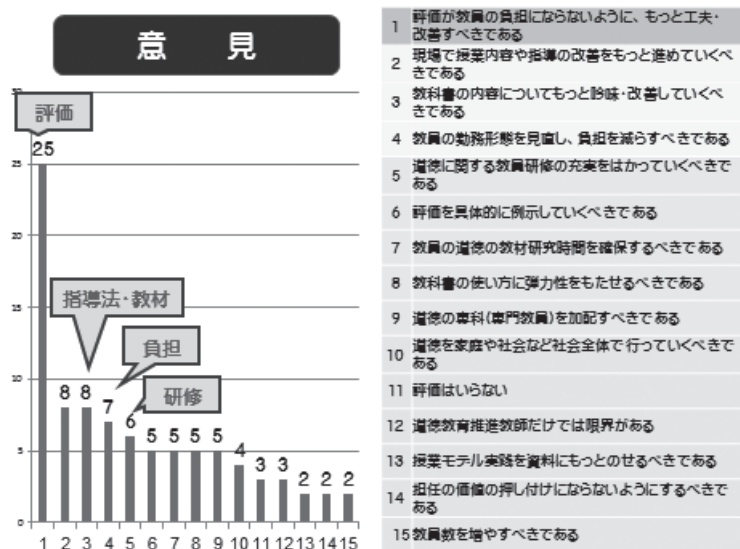


図3 「意見」の内容

2018年3月の調査結果は、小学校において4月から「特別の教科 道徳」が実施となる直前のものであり、2019年3月の調査結果は、実施後1年間を経過した後のものである。双方共に「評価」に対する関心が一番高い。しかし、その記述を見ると2018年3月調査では、「評価に課題がある・疑問点がある」という内容であり、2019年3月調査では、「評価が教員の負担にならないように、もっと工夫・改善すべきである」という内容となっている。

これらを、他の意見と関連付けて詳しく見てみると、実施前は、「特別の教科 道徳」における評価が教員にとって初めてのことであり、「評価すべきなのか」や「どのようにするのか」といったことに加えて、「仕事量が増えることへの負担感」をもっていることが見て取れる。これに対して、小学校で実施された後の2019年3月調査では、文章による記述評価や評価そのものに対する「負担感」や「評価の仕方に対する具体的な工夫」を求める意見が寄せられており、教員が、「評価内容や評価方法等の具体的な改善・工夫」について高い関心をもっていることが見て取れる。

また、2018年3月調査では、「道徳は大事」だとする意見や、「教材や指導方法についての研修会の充実」を求める意見が見られ、2019年3月調査では、「教材や授業内容について改善を図る必要性」や、そのために「教員研修の充実」や「実践事例の参照」、さら

には「道徳の専門教員の加配」を求める意見が見られる。

これらのことから、今後は、「評価方法」・「指導内容や方法」・「負担軽減」について工夫・改善を図る必要があり、そのために「教員研修会」や「指導体制」のさらなる改善・充実が求められる。

## (2) 「その他」について

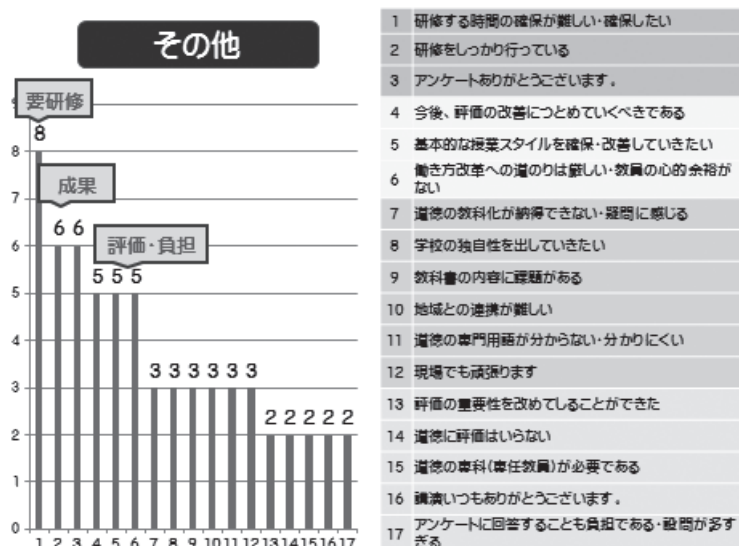


図4 「その他」の内容

「その他」を見ると、2018年3月調査では、「評価をすることに課題がある」と「力を合わせてこれから頑張る」が共に高い。また、それに続いて『「特別の教科 道徳」がどうなっていくのか不安』、「時間がないのが悩み」、「優れた授業を見たい」「実践例を知りたい」といった記述が見られた。

一方、2019年3月調査では、第1位に「研修時間の確保が難しい」（8件）、次いで第2位に「研修をしっかりと行っている」（6件）とある。また、第3位に「評価改善」・「指導方法の改善」・「働き方改善」（5件）についての記述が見られる。その他、個人的な率直な少数の意見が寄せられている。

これらのことから、2018年3月調査では、道徳の教科化を受け、教員が評価や指導方法や仕事量の負担等に対して不安や課題と感じながらも、一方でしっかりと取り組みたい・知りたいといった意欲をもち、授業実践事例や評価等に関わる研究会や研修会の充実を求めていることがうかがえる。

2019年3月調査では、研修の時間の確保が難しいとする教員と、しっかりと研修をしているという教員がいることが見て取れる。また、前向きに取り組んでいこうとする教員と、

やや消極的な教員がいることもうかがえ、個人や学校間の取組に差があることが予測できる。

従って、今後は、教員の各種研究会や研修会への参加の機会、及び内容の充実をより図る必要があり、それによって具体的な指導方法や評価方法、並びに道徳の指導に係る学校体制の工夫・改善を図っていく必要がある。このような自由記述の内容は、アンケートの結果と関連している。

#### IV. テキストマイニングを用いた全国調査自由記述の分析

ここでは、2019年3月調査の自由記述について、文書や文字列を統計学的に計量化する技法として注目されているテキストマイニング<sup>(2)</sup>を用いて分析する。この技法は、統計学・情報処理（自然言語処理）技術を応用して文書（テキスト）を単語（名詞、動詞、形容詞など）に分割し、それらの出現度数や相関関係を分析し、文書に含まれる有益な情報を計量的に抽出するものである。

テキストマイニングには、近年、多くの研究者・技術者に支持され、しかもフリーソフトとして信頼性の高いKH Coder<sup>(3)</sup>（立命館大学産業社会学部 樋口耕一准教授によって開発・公開）を用いている。本研究では、以下の5種類の基本的な分析を行う。

- ①アンケートから抽出した語の「抽出語リスト」
- ②「語」と「語」の関連性と強さを表す「共起ネットワーク」
- ③元の原文を検索して「抽出語」の使われ方を確認する「KWIC コンコーダンス」
- ④注目する「抽出語」に視点をあてて分析する「関連語検索」
- ⑤抽出語間の関連性と強さ、外部変数との関連性と強さを表わす「共起ネットワーク」である。ここでは、主として質問項目「1. ぜひ伝えたいこと」を取り上げる。

##### 1. 「1ぜひ伝えたいこと」における抽出語リスト（上位10語）から読み取れること

アンケート自由記述の各質問項目において出現度数の上位10語を比較すると、どの質問項目にも共通する語「道徳」「教育」「教科」「授業」「評価」があった。また、第1回目の2018年3月調査と比較して、2019年3月調査には、新しく抽出語リストの上位10語中に「研修」「感じる」があった。「研修」が含まれる原文を検索すると、例えば「前向きに研修で学び、考える道徳を目指して授業に色々な活動を取り入れてきた。子どもたちは道徳の授業を楽しみにしている。」等、多くは小学校において研修の必要性と効果が述べられていた。悩みながらも一步一步取り組みを進めている成果としての記述が多くあった。中学校においても「今年は「特別の教科 道徳」の研修も多かった。」と全面実施を迎える準備がなされていた様子が理解できる。「さらに、道徳教育の研究に関する発表会や研修の場があるとよい」と充実に向けた意識も見られる（図5）。



図5 抽出語リスト「1 ぜひ伝えたいこと」

2. 「1 ぜひ伝えたいこと」における共起ネットワーク（抽出語間）から読み取れること  
 質問項目「1. ぜひ伝えたいこと」のデータにおいて全体像を把握するため、共起ネットワークを活用した。ここでは、大きく6つの語のグループが見られた。テーマを付けるならば、以下の通りである（図6）。

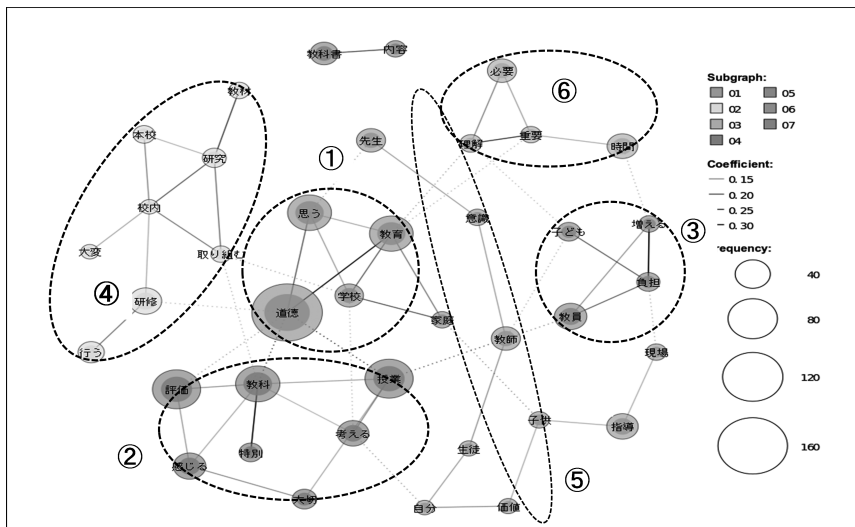


図6 「ぜひ伝えたいこと」共起ネットワーク

- ①「道徳教育、「特別の教科 道徳」推進についての概観」
- ②「評価」
- ③「負担感」
- ④「研修及び教材研究」
- ⑤「これからのあり方」
- ⑥「道徳教育（「特別の教科 道徳」）の必要性」

②③は負担感・煩雑感・効果はあるのかという不安・不満感、④⑤⑥はそれでも一步一步推進しているということ、特に⑤を見ると、「価値」「意識」と関わって「子ども」「生徒」「教師」「指導」「自分」という抽出語が見られる。

それぞれ原文を検索すると、「価値の押し付けを懸念」「管理職の意識改革が必要」等の記述がある一方、これからの「教師」の「指導」のあり方として、「授業の中で意見交換の場を設定し、子どもたちに他者理解を促し、ものの見方・考え方に幅を持たせ、自分ならどうすると考える場を提供することの必要性」という記述が複数見られた。「評価」については、「内面の評価の難しさ、外国語と総合との評価等現場での煩雑さ」は大きな課題であり、「効果はあまり感じられない」というマイナス評価にしか捉えられない現場の負担感も多くあることが読み取れる。

### 3. 「1 ぜひ伝えたいこと」における関連語検索「授業」から読み取れること

出現度数が高い『授業』や『評価』を視点として関連語検索を行い、回答内容の把握を試みた。大きく3つの語群（語のグループ）があり、テーマを付けるならば以下のような。

- ①は、『授業』との関わりの中における「教師」と「生徒」のかかわり
- ②は、「特別の教科 道徳」の『授業』のあり方
- ③は、①②を教師としてどう受け止めるかという『授業』にかかわる現場の思いが見られた。

②の「授業のあり方」の特に『多様』に注目すると、「生徒の多様性を大切にしたい」「生徒に考えを押し付けたくない」「評価方法ばかりに捉われることを懸念」「子どもの多様な考えに出会えておもしろいと再確認」等の記述が見られた。授業改善として子どもの「多様性」を大切にしようと 取り組みを進めている、子どもともっと関わりたい、評価等多忙で時間が取れず徹底してできないという不満感、負担感、やりたくてもできない葛藤がうかがわれる（図7）。



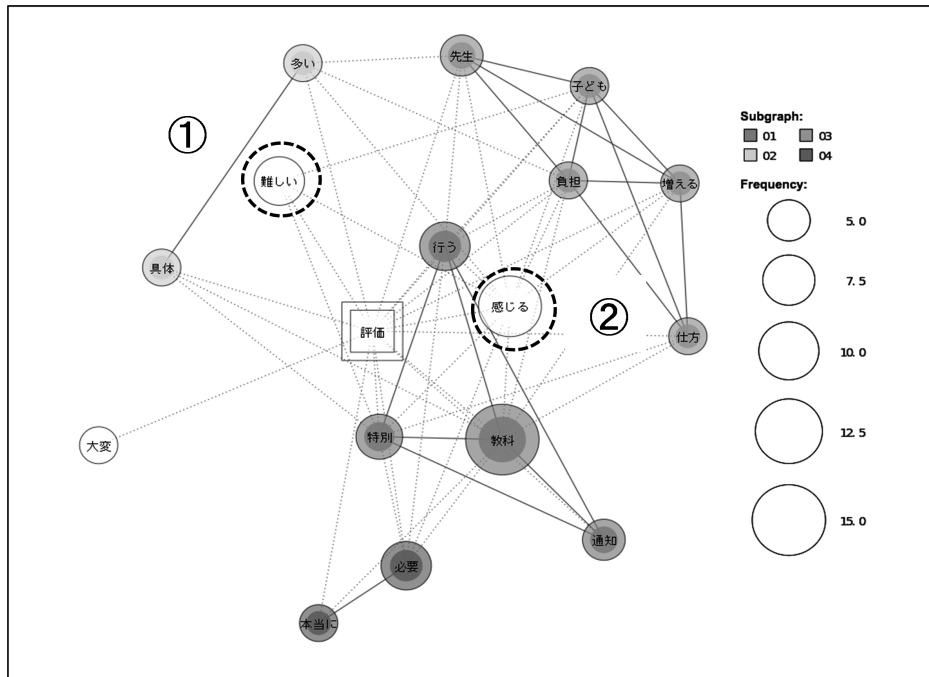


図8 関連語検索(評価)の共起ネットワーク

### 5. 「1 ぜひ伝えたいこと」における関連語検索「研修」から読み取れること

「研修」については、「授業づくりと評価の仕方についての校内研修が効果をあげている」「道徳教育についての研修は多くあったが、評価に関する具体的な研修がほぼなく、そこが知りたいと思う教員は多かった」「研修はしているが評価についての理解は深まっていない」等、子どもに寄り添って授業を展開することによって、子ども理解が深まるという喜びを実感する一方、評価の研修をしても理解は深まらない、負担感が残ると感じている教員もいることがわかる。関連語検索「研修」において、「行く」という語に着目すると、「文章で行う評価の必要性が感じられない」「評価の書き方がうまく伝わっていない」と書かれていた。通知表における子どもの評価のみが多く意識されているが、授業改善のための「評価」があまり意識されていないことが読み取れる(図9)。



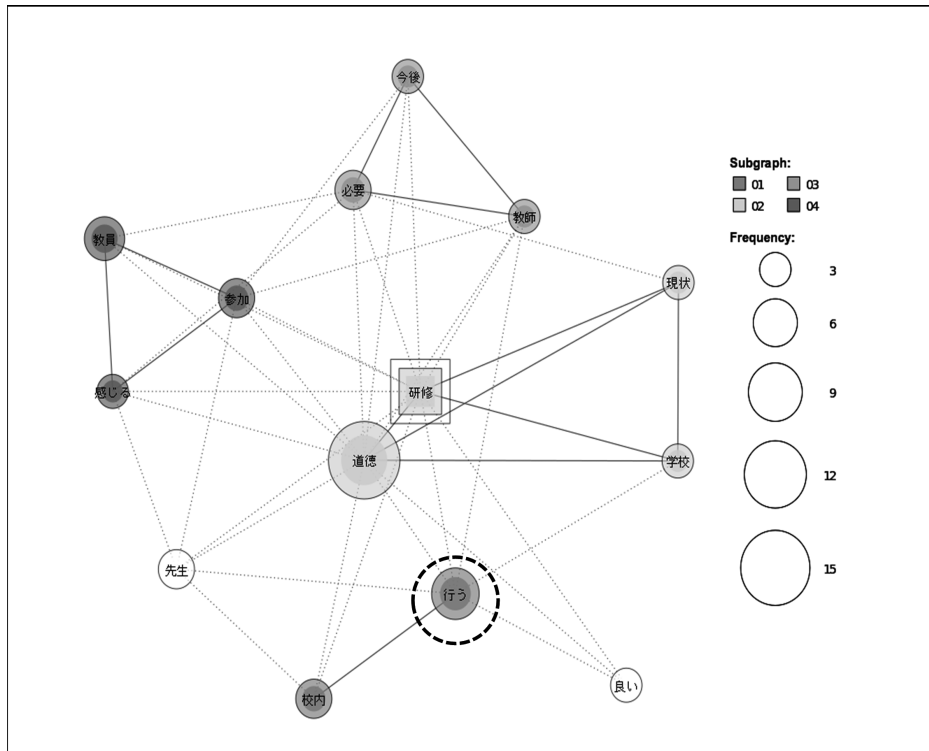


図9 関連語検索(研修)共起ネットワーク

6. 「1 ぜひ伝えたいこと」における共起ネットワーク（外部変数と抽出語間）から読み取れること

それぞれの職階における回答者の意識を抽出語から、或いは抽出語どうしの関わりから検討した。また、それによって学校の動きについても探った。

1は校長 2副校長(教頭) 3道徳教育推進教師(道徳主任) 4教務主任、研究主任 5それら以外を表す(図10)。

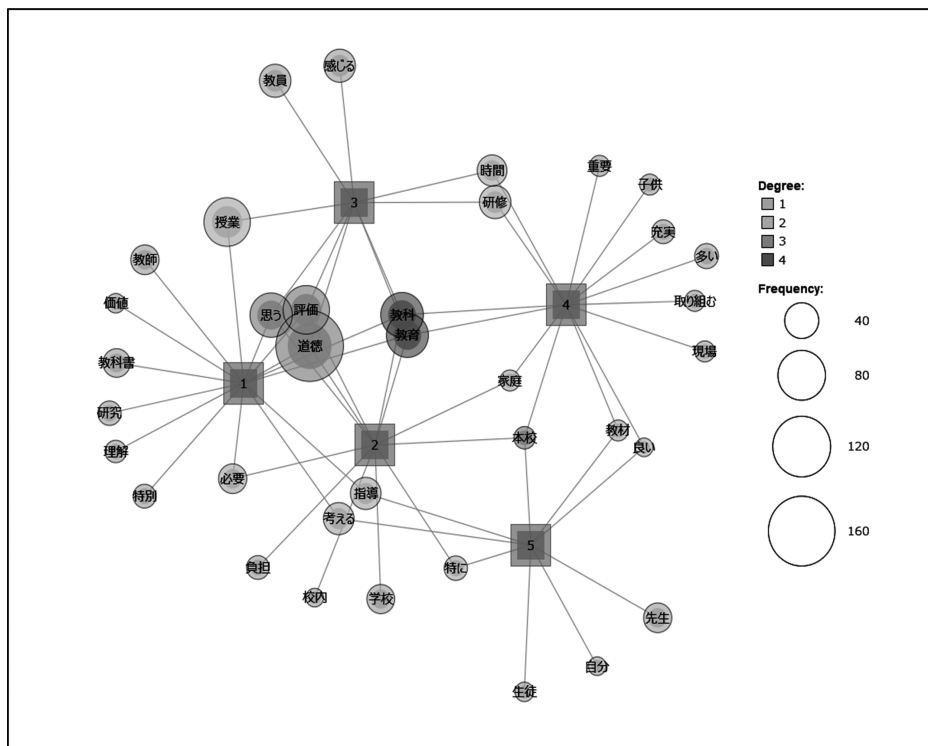


図 10 抽出語と外部変数（回答者の職階）との共起ネットワーク

① 職階間で共通する抽出語から読み取れること

「3 道徳教育推進教師（道徳主任）」と「4 教務主任、研究主任」は、実質的に授業に関わって担任などの職員と日々つながって牽引している立場である。2 者の間に強く関わる抽出語に「研修」「時間」がある。原文に戻ると、「時間」においては、「道徳教育によく取り組み成果も出ているが、時間が不足」「熱心な先生程、（子どもの変容する姿を見て）喜びは大きいが評価にかかる時間が増えている」「教科化は 35 時間確保に結びついている」とあり、「特別の教科 道徳」推進に関わって時間の確保や担任等への支援に努める「3 道徳教育推進教師（道徳主任）」や「4 教務主任、研究主任」の姿が読み取れる。また、「研修」においては、その成果として「研修内容・方法の充実の為の校内研修の積み重ねで効果が出ている」「小中連携で、若い先生や中学校の先生が道徳に関心をもって前向きに研修に参加」などと述べている。さらに、「意識改革につながる研修、評価に関する具体的研修、道徳教育の研究に関する発表や交流の場が必要」と今後の研修のあり方についても言及されていた。

② 学校としての動きが読み取れること

共通する抽出語を見ると、職務内容に重なりがある所で、協力的に取り組んでいることが

理解できる。上述の「3 道徳教育推進教師（道徳主任）」と「4 教務主任、研究主任」においても協力的な取組みが見られたが、「3 道徳教育推進教師（道徳主任）」の動きに関しては、「1 校長」との間にも共通する抽出語がある。言い換えると、「3 道徳教育推進教師（道徳主任）」と「1 校長」が「授業」について、よく関わり、取組みを進めている学校が多くあるといえる。他の職階と共通する抽出語が見られない「2 副校長（教頭）」は、道徳教育推進について特にリーダーシップ的な抽出語は見られないが、全体としての認識を共有しながら、道徳教育推進においては、他職階のサポート役であると考えられる。1～5の職階がビジョンと課題を共有しながら進めている学校もあるということが、共通する抽出語とその原文から判断できる。

以上、KH Coder における上記の機能を用いて、本アンケート調査の自由記述について分析した。まとめると以下のとおりである。

抽出語リストを検討すると、2018 年 3 月調査においては、抽出語の上位 10 語に「評価」が含まれていた。「特別の教科 道徳」において、「評価」は難しい」という取組み前の不安、漠然とした負担感の高まりが伺われる。2019 年 3 月調査においては、中学校では実施準備期間中であったが、小学校ではすでに実施されている中、抽出語リストには、「評価」と新たに「研修」「感じる」が上位 10 語に含まれていた。抽出語リストと関連語検索による分析とを合わせて検討すると、授業実施に伴う「負担感」は、具体的内容を伴って現われてきていることが読み取れる。現場の教員にとっては、評価を行ったことによる効果の実感とともに、研修をしたものの評価に関する不適切な記述など、研修自体の効果が実感できないという現実があることを示している。

一方、授業改善を進めることによって「子どもの多様な考えに出会えた」「他の教育活動の中で子どもが道徳とのつながりを見つけ、補充・進化・統合して、より理解が深まって行くような手応えがあった」など子どもの変容を受けとめていること、そして、「もっと充実した研修を受けたい」と思っていることなども見受けられた。

結果的に、次のことが課題であるといえる。

先ず、教育現場が求める「評価」は、通知表を用いて、保護者・子どもに個々のよさを如何に伝達するのかということであり、それについて、現在、教員は、一定の情報を得ることができる状況にある。今後は、評価の積み重ねから個々の子どものよさを教員の主観だけに頼ることなく表現できるような方法の確立と工夫が必要となる。さらに、教育現場の「過剰負担」と「時間の確保」を念頭に置きながら、本来の授業改善にも繋がる評価方法についての研究が求められる。

次に、これからの道徳教育・「特別の教科 道徳」の推進においては、学校現場が求める充実した内容の研修会の開催や現場での授業のサポートが重要である。それには、よりよい道徳教育・「特別の教科 道徳」推進のための実践研究を通して、校長及び道徳教育

推進教師等が明確なビジョンを示せるように、共に自校における道徳教育充実の方策を考えていく必要がある。  
(文責 小山久子)

## 注

(1) 押谷由夫、矢作信行、齋藤道子、木崎ちのぶ、谷山優子、小山久子(2019)「学校現場における道徳教育改革への対応と意識に関する調査研究(1)―全国調査の統計分析と自由記述分析を中心として―」『武庫川女子大学教育研究所 研究レポート』第49号 pp.63-94

(2) テキストマイニングについては、次の文献を参照。

- ・「KH Coder: 計量テキスト分析・テキストマイニングのためのフリーソフトウェア」(URL)  
<http://kncoder.net/> (2020年3月1日取得)
- ・樋口耕一(2020)『社会調査のための計量テキスト分析 - 内容分析の継承と発展を目指して - 第2版』ナカニシヤ出版
- ・牛澤賢二(2018)『やってみようテキストマイニング自由回答アンケートの分析に挑戦!』朝倉書店、pp.15-35

(3) KH Coder については、注(2)のURL及び文献を参照。

※ 本研究は、科学研究(B)「道徳教育課題に対応する『特別の教科 道徳』を要とする道徳教育プログラムの開発研究」課題番号17H02706の研究の一部である。

※ 押谷のホームページ (<http://oshitani.mints.ne.jp/>) も参照のこと。